

能求の菩提心

伊藤教宣

一、はじめに

空海の『三昧耶戒序』⁽¹⁾に見られる大菩提心、「能求の菩提心」・「所求の菩提心」⁽²⁾をどのように解釈すべきなのか、その解釈は今日までに厳密に定義されていたのであろうか。筆者は昭和六十三年に日本印度学仏教学会において発表の機会を得て、「印度学仏教学研究」⁽³⁾に小論を掲載させて戴いたのであるが、その内容についての批判（肯定も否定も）⁽⁴⁾については今も耳にすることはない。

その後、平成四年に堀内寛仁先生は『いずみ』⁽⁴⁾に「発菩提心の真言について」と題する玉稿を掲載されており、その中で、

（前略）

而して、私がこういう事を、くどくど述べるのは、私が先年、梵蔵漢の三本（サンスクリット本文と、チベット訳と、漢訳の三本）及びチベット訳の註釈書等を参照して、世界で始めて校訂出版した『初會金剛頂經の梵本』を、残念ながら未だその全訳、和訳の出版、完成が出来ずにいるのであるが、既に私の

校訂した梵本を和訳して下さった先生方が、（大正大学の高橋尚夫先生が、〈我は菩提心を起こさん〉、乃至〈菩提心を起こさしめた〉と訳して居られるのに対し）、他の先生が〈オーン私はさとりを求める心を生起します〉乃至〈さとりを求める心を生起して云々〉とか、〈オーン私はさとりを求める心を生起こそす、乃至〈さとりを求める心を生起させた〉というように、サンスクリット原文には、単に「菩提心を(bodhi-cittam)」とあるのに、他の二人の先生が共に言葉を足して「さとりを求める心」と訳され、また菩提心には、能求と所求の二種の菩提心がある中の、「能求の菩提心」と受け取れるように、「さとりを求める心」と訳出している事に対し、私は少なくとも、初會金剛頂經の、五相成身觀の、第二の「修菩提心の真言文」の「菩提心」という言葉は、能求の方でなく、「所求の菩提心」即ち「一切衆生悉有佛性」の佛性、もしくは、諸佛の悟りの心、即ち正等正覺(samyaksambodhi)の心そのものを指す言葉であり、真言句であると、確信しているからである。どうか発菩提心真言を唱えられる時は、この点に注意して頂きたいものである。

と言われている。ここに述べられていることについて筆者と意見を異にする部分がある。それは、先生は「五相成身觀」の第二「修菩提心の真言文」が説かれる境地について「能求の方でなく、「所求の菩提心」即ち……」と解釈されているが、筆者は「まさしくこの菩提心こそが〈能求の菩提心〉である」と理解しているからである。ここで「能求の菩提心」とか「所求の菩提心」といわれるのは、空海の著された『三昧耶戒序』でのそれであることが前提であって、そのことを踏まえた上で筆者の意見を述べさせて戴き、読者のご批判を仰ぎたいと思うのである。

二、『三昧耶戒序』『大菩提心』への流れ

空海はどのようなものを根拠として「能求の菩提心」というものを考え出されたのであろうか、そのことから考察を始めよう。『三昧耶戒序』のそこでは『菩提心論』⁽⁵⁾から、

凡そ人の善と悪とを為さんと欲するには、皆先ず其の心を標して、而して後に其の志を成ず

と言う引用文が見られること、更には『三昧耶戒序』での四種心という構造が『菩提心論』の三種心の構造を依用されていることから見て、『菩提心論』を根拠としていることが明らかである。そこで、この能求の菩提心が『菩提心論』でのどの境地を意味しているか、どこの境地に重ね合わせることが出来るかを考えてみたい。

『菩提心論』では、

大度量有つて勇鋭にして惑無からん者宜しく仏乗を修すべし。当に是くの如くの心を発すべし。我今阿耨多羅三藐三菩提を志求して余果を求めじと。(中略) 所以に菩提を求むる者は菩提心を発して菩提の行を修す。既に是くの如くの心を発し已て須く菩提心の行相を知るべし。(中略) 是の心を発し已って勝義行願三摩地を戒と為す。乃し成仏に至るまで時として暫くも忘るること無し。云云

といわれているように、阿耨多羅三藐三菩提を志求する者はまず三種の心（行願心・勝義心・三摩地心）を発さなければならぬ。いわゆる初発心としての発菩提心である。そのときに三種の心を同時に発して、その行を同時にスタートさせなければならぬように考えてしまうのであるが、そうではないのである。三摩地心の冒頭で、

真言行人是くの如く觀じ已つて、云何が能く無上菩提を証する。当に知るべし、法爾に普賢大菩提心に住すべし

と言われており、勝義心の行が完成して「普賢大菩提心に住」すことがなければ三摩地心の行は始まらないのである。すなわち最初に阿耨多羅三藐三菩提を志求したいという境地（初発心）があるけれども、その境地と三摩地の行を始める境地とは全く異なった境地と言うことである。三摩地心を説く最後の偈文に、

若し人仏慧を求めて 菩提心に通達すれば

父母所生の身に 速に大覺の位を証す

と言われているが、「若し人仏慧を求めて」と言われるのが最初の「阿耨多羅三藐三菩提を志求」する境地であり、「菩提心に通達すれば」といわれる境地が勝義心の行が完成した境地、「普賢大菩提心に住」する境地ということである。

この三摩地の行を始める「普賢大菩提心に住」する境地、勝義心の行が完成した境地とはどのような境地であるかといえ「一切法の無自性、空を觀する」境地のことで、『大日經』「住心品」⁽⁶⁾に示される三句の因とされる「菩提心」と同じ境地を指しているのである。「住心品」でこの「菩提心」が「一切法の無自性、空を觀する」ことであり、「諸法は無相であり、虚空の相である」といわれるものである。この菩提心はどのようなにして得られるかと言え、心続生の最後に極無自性心が生じた境地として得られるのである。すなわち、三句の因とされる「菩提心」というのは極無自性心が生じた境地として得られた、そのものである。この境地を『菩提心論』では勝義心の行の完成と捉えているのである。

さて、『菩提心論』での「勝義心」の完成した境地、「普賢大菩提心に住」することが出来た境地の、その根拠となっている『大日經』「住心品」の「因とされる菩提心」としての極無自性心が生じた境地に対して、

堀内先生が「能求の方ではなく所求の菩提心」とされた『金剛頂經』⁽⁷⁾の五相成身觀で示される第一の「通達菩提心、*oṃ cittaprativedham karomi*」オーム、我は自心の源底に通達す」という境地から第二の「修菩提心、*oṃ bodhicitam utpādayāmi*」オーム、我は菩提心を発せん」という境地は、『大日經』「住心品」のその境地に対応させて構築されたものと考えることができる。⁽⁸⁾そのような意味において『菩提心論』の最初に言われる「阿耨多羅三藐三菩提を志求する（三種の心を発すときの）」境地でないことは当然であろう。すなわち『菩提心論』の「普賢大菩提心に住」する境地・通達菩提心の境地、『大日經』「住心品」に示される三句の因とされる「菩提心」、『金剛頂經』の五相成身觀で示される「通達菩提心」から「修菩提心」までの境地の三者は同一の境地ということである。これが空海の『三昧耶戒序』における「大菩提心」の根拠となっているのである。

三、「能求」か「所求」か

『三昧耶戒序』「大菩提心」のうちの「能求の菩提心」を説く冒頭では『菩提心論』の文章が引用されているけれども、それを『菩提心論』で示され方を見ると「阿耨多羅三藐三菩提を志求（三種の心を発すときの）」する境地、初発心の境地を意味しているので、『三昧耶戒序』での「能求の菩提心」もその境地を意味しているものとして理解されているようであるが、その理解でよいのであろうか。『三昧耶戒序』の構造は『菩提心論』を模倣したものと考えられるのであり、まず最初に四種の心を発すことが『菩提心論』での「阿耨多羅三藐三菩提を志求（三種の心を発すとき）」して三種の心を発すことと類似しているものと見なければならぬ。真言密教の世界での「初発心」とでも言うべきものである。その発すべき第四番目に「大菩提心」とい

うものが設定されているのであるけれども、このうちの「能求の菩提心」が「阿耨多羅三藐三菩提を志求（三種の心を発すとき）」するものと同じ境地のもので、真言密教の世界での「初発心」と同じものということになると、「最初に四種の心を発すこと」そのことと、その発した四種の心の中の「能求の菩提心」というそのものと同じものということになり、矛盾した構造になってしまうのである。そのような意味において「能求の菩提心」は、最初の「菩提を求める心」としての「発菩提心」・「初発心」ではないということである。

更には『三昧耶戒序』というものの性格から考えてみたい。真言密教の行者が特定の境地に到達して灌頂を授かるときに、阿闍梨から「菩提心に通達したこと」を宣告されて三昧耶戒を授かるのである。その三昧耶戒を授かるときの心得として示されたものがこの『三昧耶戒序』である。この三昧耶戒を授かるときの境地（真言密教の行者が特定の境地に到達したとき）というのが、先述したとおりの『菩提心論』の最初に言われる「阿耨多羅三藐三菩提を志求（三種の心を発すとき）」する境地ではなく、三摩地心冒頭の「普賢大菩提心に住」する境地・通達菩提心の境地、『大日経』「住心品」に示される三句の因とされる「菩提心」、『金剛頂経』の五相成身観で示される境地の三者は同一の境地」ということであり、「能求の菩提心」もその境地の菩提心として想定されているものと考えられるのである。四種の心のうちのこの一つが「大菩提心」といわれるのは『菩提心論』の三摩地心が説かれる冒頭で「普賢大菩提心に住す」といわれる「大菩提心」を用いたということも想起できるのである。このように三昧耶戒を授かるときの境地が「阿耨多羅三藐三菩提を志求（三種の心を発すとき）」する境地、初発心の境地ではなく、「普賢大菩提心に住」した境地、「通達菩提心」の境地であることは明らかである。

『菩提心論』の「普賢大菩提心に住」する境地・通達菩提心の境地、『大日経』「住心品」に示される三句の因とされる「菩提心」、『金剛頂経』の五相成身観で示される境地の三者が同一の境地であるとして、なぜそ

能求の菩提心（伊藤）

の境地が「能求の菩提心」であって「所求の菩提心」ではないといえるのか、そのことを考えてみなければならぬ。空海は、その「所求の菩提心」について

所求の心とは所謂無尽莊嚴金剛界の身是れなり。大毘盧遮那四種法身四種曼荼羅。皆是れ一切衆生本来平等にして共に有せり。

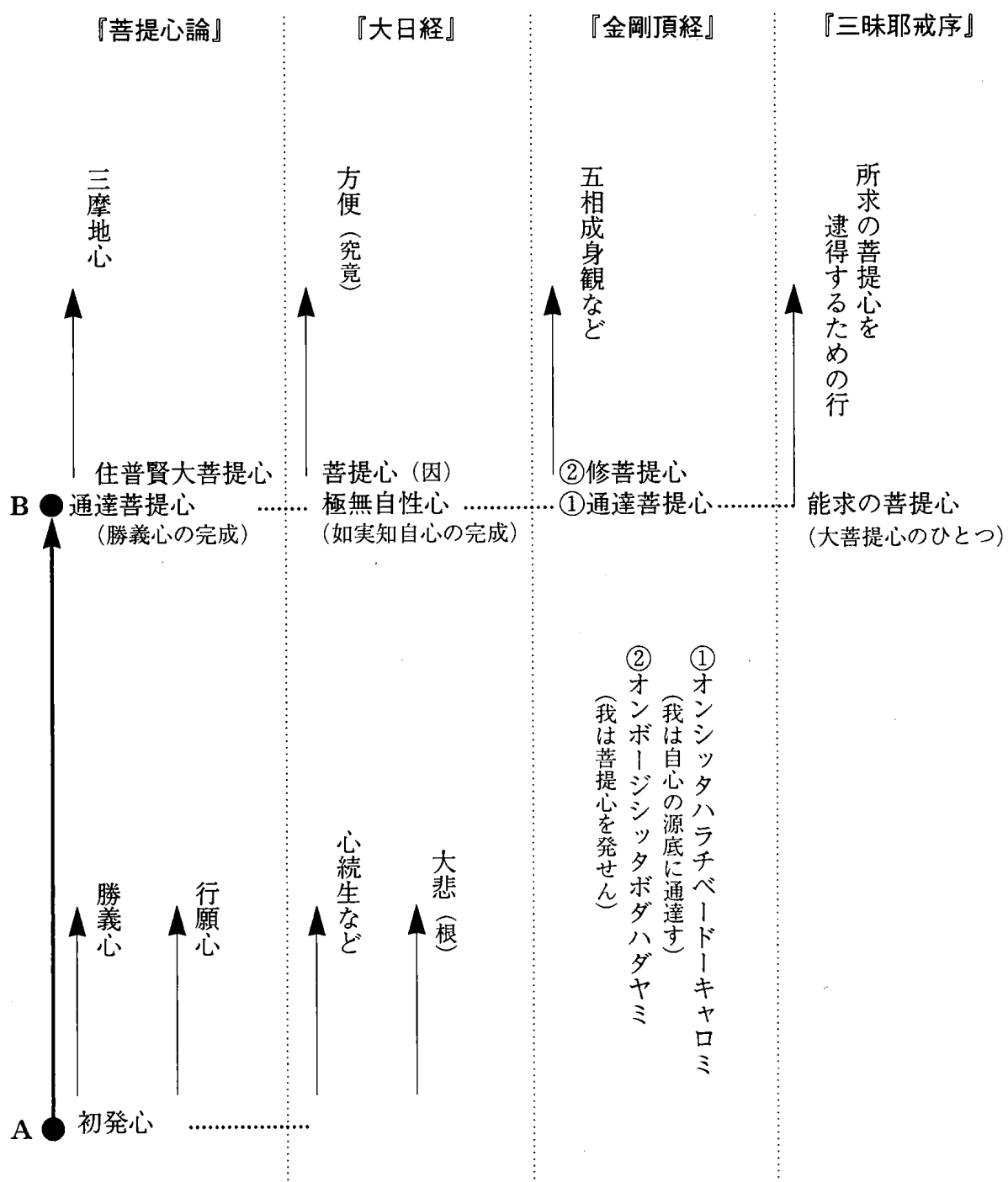
といわれている。仏教におけるその目的は「成仏」ということであるが、空海においてのその目的は単なる成仏ということだけではなく、具体的にその目的を規定しているのである。ここでいわれている法身毘盧遮那であり四種法身であり四種曼荼羅というものであるが、その成立理論を詳細に説明したものが『即身成仏義』⁽⁹⁾であり、その中では法身自証の三摩地・法仏自内証の三摩地・法仏悉地などという表現もされている。また『即身成仏義』に示された、その法身毘盧遮那などの成立理論によって、修行者も衆生もその中に組み込まれているのであり、しかも修行者、あるいは衆生のうちにもそれが具わっているというのである。『三昧耶戒序』での「所求の菩提心」はそのような成立理論によって裏付けられているのであるが、その成立理論を理解して修行者自身のうちに具わっていることを確認できただけでは完成ではないのである。修行者は成立理論を理解して修行者自身のうちに具わっていることを確認してから、そのものを逮得するための行を修習しなければならぬのであって、その修行の完成によってそのものが逮得できるのであり、そのことを持明悉地というのである。

すなわち、「所求の菩提心」としてのその成立理論を理解して修行者自身のうちに具わっていることを確認できた境地が「能求の菩提心」であり、そのものを逮得するための行を修習するスタート地点ということであって「所求の菩提心」ということではないのである。「所求の菩提心」は逮得すべきそのものであって、それを逮得できたときには「所求の菩提心」とはいわずに持明悉地というのである。

この「能求の菩提心」は複雑なものである。最初、阿闍梨から三昧耶戒を授かって「菩提心に通達した」ことを宣告されたときには「所求の菩提心」としての「成立理論によって、修行者も衆生もその中に組み込まれているのであり、しかも修行者、あるいは衆生の中にもそれが具わっている」そのものは見えないということである。その後、授戒に引き続いた灌頂に臨み、曼荼羅の前に導かれて、そこで曼荼羅を見せられたときに「成立理論を理解することによって、修行者も衆生もその中に組み込まれているのであり、しかも修行者、あるいは衆生の中にもそれが具わっている」ものが、通達菩提心という菩提心の正体であることが初めて確認できるのである。すなわち、菩提心に通達したときにはそのことが理解できないけれども、曼荼羅を見せられたときに理解できるのである。いいかえれば、その菩提心に通達していなければ曼荼羅を見てもその意味は全く理解できないのであり、また曼荼羅を見る資格も得ていないのである。そのような意味において、通達菩提心の段階では「所求の菩提心」を確認できていないのである。菩提心に通達してから曼荼羅を見て（曼荼羅の中にはいつて）、そこから成立理論を理解して修行者自身のうちに具わっているものを逮得するための行がスタートするのであるが、その境地のことを「能求の菩提心」というのであり、「逮得すべきものを確認することができた境地」・「逮得するための行を始めることが可能となった境地」という語句として捉えることができるのである。この境地からいよいよそのものを逮得するための（曼荼羅の中での）行（瑜伽行・三摩地の行）が始まるのである。その意味において「能求の菩提心」の存在意義があるのである。

以上のような考察によって、通達菩提心から修菩提心までの菩提心を「所求の菩提心」だと言ったとしても、それはただ単に見えただけ、確認できただけということであって、逮得したものではない、いうことができる。そうして、それが見えた、確認できた、そのときの菩提心を「能求の菩提心」いうことができるのである。

能求の菩提心（伊藤）



四、むすび

『金剛頂經』所説の五相成身觀の第一「通達菩提心」から第二「修菩提心」に拘わる菩提心と、『三昧耶戒序』所説の「大菩提心」に拘わる「能求の菩提心」との対比を試みたのである。堀内先生の主張が「五相成身觀の「修菩提心の真言文」の菩提心が『菩提心論』での「阿耨多羅三藐三菩提を志求（三種の心を発すときの）」する境地ではなく、通達菩提心の菩提心、あるいは「普賢大菩提心に住」するときの菩提心である」という主張であるならば、そのことについては筆者も同じ考えである。しかしながら、それを「能求の菩提心」と解釈するか「所求の菩提心」と解釈するかについては、筆者との解釈が異なるのである。もし、通達菩提心から修菩提心の境地が「所求の菩提心」（この語句の使い方も違¹⁰うが）ということになってしまったら、すでにその段階で行（瑜伽行・三摩地の行）が完了したことになり、その後の行は必要ないことになってしま¹⁰うのである。「所求の菩提心」としての「成立理論を理解することによって、修行者も衆生もその中に組み込まれているのであり、しかも修行者、あるいは衆生の中にもそれが具わっている」そのことが確認できたことと、それを逮得できることは全く異なるのである。「所求の菩提心」を確認してもそれは完成ではなく、そこから逮得の完成（持明悉地）に向けての行が始まるのであって、その行をスタートできるようになった境地のことを「能求の菩提心」というのである。このような解釈を踏まえてみた場合、今日まで「能求の菩提心」が正しく理解されていなかったと言わざるを得ない。

空海が「能求の菩提心」を説示するときに『菩提心論』の「阿耨多羅三藐三菩提を志求（三種の心を発すとき）」の初発心を意味する文章を引用しているためにそのような誤解が生じたものと考えられるけれども、逮

能求の菩提心（伊藤）

得すべきもの（「所求の菩提心」）を掲げ見据えて、それを逮得するための行が始まる、という空海の構築した思想体系を理解しなければならないのである。

註

- (1) 『三昧耶戒序』、『弘法大師全集』第二輯・一三二―一三九
- (2) 能求・所求は『大日経疏』に見ることができ、空海はこれを用いたと思われる。註3の小論を参照されたい。
- (3) 「能求と所求」、『印度学仏教学研究』第三十七卷第一号（昭和六十三年十二月）
- (4) 『いずみ』第2号、和泉青壮年会発行（平成四年三月二十日）
- (5) 『菩提心論』、『大正蔵経』三二・五七二b―五七四c。
『三昧耶戒序』では「譬えば人有つて善と悪とを為さんと欲せば必ず先ず其の心を標して而して後に其の行を行ずるが如し。云云」と言われており、『菩提心論』とは表現が微妙に異なる。これは「所求の菩提心」を見据えたことによる表現であり、空海の意図した所であろう。
- (6) 『大日経』「住心品」、『大正蔵経』一八・一c―二b
- (7) 三卷本『金剛頂経』、『大正蔵経』一八・二〇七c―二〇八a
- (8) 『両部大経』上（真言宗豊山派編）、二七七からの本文、及び二七九からの註。
- (9) 『即身成仏義』、『弘法大師全集』第一輯・五〇六―五一九。

空海の即身思想、あるいは三大思想については「豊山学報」三十八、同三十九、及び同四十三号で考察した。参照されたい。

また、本文中で多用した持明悉地・法仏悉地については「頼瑠僧正七百年御遠忌記念論集『新義真言教学の研究』」、および「小野塚幾澄先生古稀記念論集」で考察した。参照されたい。

(10) 空海の思想において、「所求」というのは法仏悉地と同じように求める当体であって、修行者が逮得したそのことは持明悉地というべきであろう。

また、「一切衆生悉有仏性」の仏性と「通達菩提心」の菩提心とが同じものである、という考え方も菩提心思想を考える上で短絡的過ぎるのではないだろうか。ここに扱った資料『大日経』『住心品』、『金剛頂経』、『菩提心論』、『三昧耶戒序』での菩提心は仏性と同一概念ではなく、「特定の境地」と考えるべきではなかろうか。

【キーワード】能求の菩提心、所求の菩提心、普賢大菩提心、通達菩提心、修菩提心